

先の白詩の「東南行」は、白居易が元稹を含む八人の親友に送ったものに対し、「代書詩」は「元稹」のみに向けられた唱和詩だからではないか。換言すれば、この道真が「敍意一百韻」で最も訴えたかったのは、今の自分の心情を共に分かちあえる「一人」の友も持ち得ぬ「孤独感」ではなかったのか。自分の生の軌跡を「誰とも共有出来ぬ絶望感」とも言い直せるものである。

白居易が「代書詩」で「狂吟す 千字／因つて微之に寄せしむ」と結ぶのと、道真が「意を敍ぶ 千言の裏／何人か一に憐むべき」の詠むその詩情の落差こそが、道真のこの詩で最も後世の者に伝えたかったことではないだろうか。その心情は、この白居易の「東南行」や「代書詩」を下敷にすることで、改めて浮きぼりにされる構成法を意図しているのだと分析した。ここにこの道真の詩の表層にある古典籍の典故を散りばめることにより、古人の事蹟により、我が身を慰撫する心情と、その深層に元白の唱和百韻詩の内容を響かせることによって、この詩の核心を浮きぼりにさせる重層構造の真相が明らかにされるように思う。

注

(1) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十四)―」(『国語国文学研究』第四十二号) 熊本大学国語国文学会

(2) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十四)―」(『国語国文学研究』第四十二号) 熊本大学国語国文学会拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十五)―」(『有明工業高等専門学校紀要』第四十三号)

拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十六)―」(『国語国文学研究』第四十三号) 熊本大学国語国文学会

拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十七)―」(『有明工業高等専門学校紀要』第四十四号)